## 「玉音放送」の公演に寄せて

釧路市長　蝦　名　大　也

戦後70年を記念した「玉音放送」公演のご盛会を心よりお慶び申し上げます。

昭和天皇による終戦の詔書がラジオ放送されてから70年を迎えた本年は、旧釧路市が「核兵器廃絶平和都市」を宣言してから30年、また、終戦から半世紀を経て広範な市民団体が一丸となって募金活動を行い、平和を願う新たなモニュメントとして栄町平和公園に「平和の祈り」が建立されてから20年を迎える節目の年でもあります。

このため釧路市でも、被爆地訪問市民代表団の派遣増員や、これまで市内中学校で開催してきた「平和のつどい」の対象を広く市民に拡大するなど啓発事業の充実、更には、毎年８月15日に栄町平和公園で挙行している「釧路市戦災死没者慰霊式並びに平和祈念式」において、次代を担う高校生による合唱を披露いただくなど、周年にあたっての取組を推進してきたところであります。

平和は、社会全体が不断の努力を重ねることで実現されているものであり、常にその努力に感謝する姿勢が必要です。

市としても、「核兵器廃絶平和都市宣言」の趣旨を広く啓発するために実施している小・中・高校生を対象とした平和コンクールなどに継続して取り組み、恒久平和を誓う市民の思いを広げて参りたいと考えております。

結びになりますが、開催にあたりご尽力いただきました玉音放送上演実行委員会の山田和弘代表はじめ関係者の皆様に敬意を表しますとともに、玉音放送に至る様々な葛藤を描く本公演を通じて、戦争の悲惨さや平和の尊さを多くの市民の皆様に改めて心に刻んでいただくことを祈念し、挨拶とさせていただきます。

## 家族で「平和」を考える機会に

「玉音放送」上演実行委員長
釧路ユネスコ協会　顧問　山　田　和　弘

太平洋戦争が終戦し70年節目の本年、国会で激しく賛否の議論が交わされるなか集団的自衛権を容認する「安保関連法案」が可決され、「平和」や「日本国憲法」の意義についてマスコミでも数多く取り上げられたこともあり国民の間で大きな関心を呼び起こした。

私自身３歳で終戦を迎え悲惨な釧路空襲も広島や長崎の原爆投下も後年知ったことだった。したがって本年８月にTVで放映された半藤一利著作「日本のいちばん長い日」で戦争終結と天皇の玉音放送を決定した緊迫した御前会議の始終も小説や映画でしか知らない世代です。

2015年12月、戦後70年の締め括りとして発表する永田政允さんが書き下ろしたこの公演作品「玉音放送」は、御前会議に参列した阿南惟幾陸軍大臣が倒閣クーデター徹底抗戦といきり立つ将兵を押さえ、一方戦地で国のために戦っている兵士への思い、子煩悩な家族思いの夫や父親としての複雑な苦渋のうえの決断、そして責任をとって割腹という悲劇に至る現代の礎となったひとりの軍人の史実と心の深層を通して、静かに穏やかに現代社会に問いかけた鎮魂の物語です。

国連ユネスコ憲章にも「戦争は人の心の中で生まれるものであるから人の心の中に平和の砦を築かなければならない」とあります。この記念公演が市民と家族のみなさんで改めて平和と戦争を考え風化させないための共有の機会となれば幸いです。

## ごあいさつ

釧路演劇協議会　会長
劇団東風　代表　片　桐　茂　貴

本日はご来場ありがとうございます。

釧路市内で活動する演劇関係者の有志が多数参集する中、右城允プロデュースによる「玉音放送―陸軍大将阿南惟幾と妻綾子の物語」公演が、多くの市民の皆様お集まりのもと盛大に開催されますこと、市内演劇団体の統括組織代表として、また共催団体として、心よりお慶び申し上げます。

今回の作品は、私ども釧路演劇協議会が創立40周年記念事業として本年２月～３月に企画した「釧路演劇博覧会　劇EXPOⅡ『オトナの地区大会』」にて上演され、栄えある「釧路新聞社賞」を受賞した作品です。その台本を作者である釧路演劇協議会名誉会長永田政允氏が再構成し、キャストを一新させての、いわば「改訂再演版」となります。

また、この取り組みは戦後70年の節目となる本年に、改めて「戦争とは？平和とは何か？」を考える絶好の機会ともなり、本作品を上演する意義は決して少なく無いと考えます。

私自身、第二次ベビーブーム真っ直中、云うなれば「団塊ジュニア」であり、私の両親とも終戦後の昭和22年生まれ。つまり、流行歌の歌詞のようですが「戦争を知らずに育った親から産まれた」わけです。このような私たちが社会の一翼を担うまでになった今。今日のこの上演が私たちに何を与え、何を考えさせるのか。そして、私たちはどう行動すればいいのか？つい先日も、フランスで痛ましい出来事が起こったばかりです。「これから私たち日本人は何を語り継ぐべきだろうか」という自問に苛まれています。

演劇は、幕が上がってから降りるまでに「何らかの成長を見せる」物語と言われます。これは役者はもちろんのこと、私たち自身にとっても同様で、観終わったあと、どんな「心の成長」があるのだろうか？皆様とそんな大きな期待をしながら、客席の明かりが消えてゆくのを待ちたいと思います。

結びになりますが、本公演にご理解頂き、ご協力頂きました関係各方面の方々に心より御礼を申し上げ、また、今日の日までご尽力され、秀逸な舞台を創って頂きます俳優・スタッフの皆さんへ心から拍手をしながら、公演にあたっての、お祝いのことばといたします。　（了）

## ご挨拶

演出者　森　田　啓　子

この作品との関わりは、今年の２月に釧路演劇協議会発足40周年記念事業「劇EXPO（ゲキスポ）オトナ？の地区大会」で上演するので演出をしてもらえないかと右城プロデュースさんからご依頼を頂きました。演出など荷が重すぎる役割ですが芝居作りの段階で一観客としてこの芝居を観たときに「面白いか面白くないか」の視点で芝居作りをしようと決めてお引き受けしました。

「玉音放送」という題名にぎょ！としましたが主人公の夫婦の物語として描こうと考えました。主人公の“戦いで死ぬことは軍人として本懐であり誇りだ”の言葉に妻が“あなただけは生きていて欲しいと思いますが、軍人である限り宿命です。”と言います。胸が締め付けられる思いがします。

今回のプロデュース公演には久し振りに芝居に関わる人や自分たちの公演が終わったばかりの人、これから公演を迎える人達の協力があり出来上がった芝居です。お楽しみいただけましたら幸です。

本日は、ご来場いただきましてありがとうございました。

## 《場面展開》

### 幕開き
惟幾自害の姿

### 場　割

**1場　銀婚祝いの夜**
昭和16年１月
河南家応接間
惟幾と叔父　酒を飲んでいる
惟幾と子供
惟幾と綾子

**2場　綾子と久子**
昭和18年10月
河南家応接間
綾子と久子

**3場　次男の惟晟の戦死**
昭和19年２月
惟幾と綾子

**4場　自宅寝室**
昭和20年６月
惟幾と綾子
亡霊

**5場　御前会議後**
昭和20年８月14日
惟幾と大臣付き武官
惟幾と綾子の電話　海軍大臣　その他

**6場　玉音放送**
昭和20年８月15日
惟幾と竹下正彦
惟幾の自決
綾子と惟茂
放送

# 作品について

作者　永　田　政　允

1941年（昭和16年）12月８日未明、ハワイの真珠湾（軍港）を日本海軍が奇襲し、太平洋戦争が開始された。1945年（昭和20年）８月15日、天皇陛下のポツダム宣言の受諾について、ラジオ放送（玉音放送）が流れ国民は戦争の終結を知った。広島、長崎への原爆投下もあったが遅かれ早かれこうした結果（敗戦）になることを予想されなかったのか。意識の中に、日本は神の国で苦難の最後には神風が吹き必ず勝利すると信じていたのであろうか。アメリカに負ける言葉さえ禁句となり、囁くことも出来なかった空気にもなっていた。

山本七平氏の「空気の研究」と言う書籍があります。軍隊の中にも、戦争は総力戦でアメリカと論理的に分析、比較すると圧倒的な差があり、戦争は絶対に避けるべきだとの意見があったが、論理を超える空気がありそれに流されて行くことになった。空気がすべてを制御し統制し、強力な規範となって各人の口を封じてしまう。満州での関東軍、軍官部、政治家、官僚、大衆のなかに流れていた。

井沢元彦氏の言霊（悪い事態を想定すると現実になる）に支配されるから、最悪のことは考えない様にし、検証も避ける様になる。そして、あいまいにして口をつぐむ。

こうした指摘は、日本人的気質なのであろうか。敷行するならだれ一人として責任を取ろうとしない体質・空気を作り出している。これは戦争当時と今とどれ程変わったであろうか。

この作品は、日本の分岐点に立たされた軍人家族を描きましたが、歴史的事象をもとに実話をつないだものです。想像で描いたところもありますが、ドラマ仕立てにはなっていません。戦場で、空襲で、引き揚げで親族の方々が亡くなりました。多くの人達の命の代償に今日があることを思い起こし、戦後70年の節目の公演になればと思い作り上げました。このお芝居で当時のことを振り返る機会、語り継がれることがありましたら幸いに思います。

**満州事変**（まんしゅうじへん）
1931－33

昭和前期、日中戦争前の満州侵略戦争。1929年以来の大恐慌による資本主義の危機・中国の排日運動の激化・張学身による満鉄包囲の併行線建設などを原因とし、現状打開を武力侵略に求めたもの。関東軍は、９月18日柳条溝事件を起し、それを口実に若槻礼次郎内閣の不拡大方針を無視して戦線を拡大。戦火は熱河作戦後の塘沽協定で一応収まったが、一方、32年上海事件を起し、満州国建設から国際連盟脱退となり、第二次大戦のさきがけとなった。

**満州国**（まんしゅうこく）
1932－45

満州事変後、日本が満州に建設した国家。日本は満州に王道楽土を建設すると称し、清朝最後の皇帝宣統帝溥儀を執政に迎え、34年帝制とした。都は長春（新京）。関東軍司令官の実権下に日本人が政府要職を占め、議会はなく、官製の国民組織である協和会が唯一の政治団体であった。経済開発も三井・三菱や新興財閥（鮎川義介の満州重工業開発会社など）に握られ、全く日本の植民地・軍事基地化した。日本の敗戦により崩壊。

**二・二六事件**（ににろくじけん）
1936.2.26～2.29

昭和前期、陸軍のクーデター。皇道派青年将校が部隊を率いて首相官邸・警視庁などを襲撃、東京の中枢部たる永田町一帯を占領、軍部独裁政権の出現を期した。首相岡田啓介は危く難をのがれたが蔵相高橋是清・内大臣斎藤実・教育総監渡辺錠太郎は殺され、侍従長鈴木貫太郎は重傷を負った。政府・軍部は処置に迷い、28日初めて鎮圧を開始。首謀者はすべて死刑となり、粛軍によって皇道派が一掃されて統制派が軍の実権を掌握、広田弘毅内閣の主導権を握って、準戦時体制を固めた。ファシズムの制覇に重要段階を画する事件。

**日中戦争**（にっちゅうせんそう）
1937－45

昭和前期、蘆溝橋事件に始まる日本の中国侵略戦争。日本軍は政府の不拡大方針を無視して戦火を全中国に拡大、37年中に北京・上海・南京を、38年徐州・広東・武漢を占領した。中国国民政府は重慶に遷都して抗戦。日本は40年汪兆銘を援助して南京に政府を樹立させたが、国民党・共産党合作の抗日統一戦線の抵抗強く、日本は長期戦に苦しみ、太平洋戦争に突入。大軍を駐留したまま敗戦。

**日ソ中立条約**（にっそちゅうりつじょうやく）
1941

太平洋戦争直前に締結された中立条約。松岡洋右外相がモスクワで調印。1)平和友好と相互不可侵、2)一方の第３国との戦争における他方の中立維持など、４条。これにより ソ連は独ソ戦勃発に備え、日本は北守南進政策の方向をえて、太平洋戦争に突入。45年ソ連の対日宣戦により破棄。

## 1945年（昭和20年）８月15日の玉音放送が流れるまでの歴史小史

| 年　代 | 社会情勢 | 世界の動き |
|---|---|---|
| 1931(昭和６) | ９月　満州事変勃発 | |
| 1932(昭和７) | ３月　満州国建国宣言<br>５月　５・15事件 | 10月　リットン報告書発表 |
| 1933(昭和８) | ３月　国際連盟脱退 | |
| 1934(昭和９) | | |
| 1935(昭和10) | | |
| 1936(昭和11) | ２月　２・26事件 | 11月　日独防共協定調印 |
| 1937(昭和12) | ７月　日中戦争<br>12月　日本軍南京占領 | 11月　日独伊防共協定調印 |
| 1938(昭和13) | ４月　国家総動員法公布 | |
| 1939(昭和14) | ５月　ノモンハン事件 | ７月　米国日米通商条約廃棄を通告<br>９月　第２次世界大戦開始 |
| 1940(昭和15) | ９月　日独伊三国同盟成立 | |
| 1941(昭和16) | ７月　関東軍特種演習<br>12月　ハワイ真珠湾攻撃(太平洋戦争開始) | ４月　日ソ中立条約調印<br>７月　アメリカ対日石油全面禁輸 |
| 1942(昭和17) | | |
| 1943(昭和18) | | ９月　イタリア無条件降伏 |
| 1944(昭和19) | ６月　マリアナ沖海戦<br>10月　レイテ沖海戦 | |
| 1945(昭和20) | ３月　東京大空襲<br>８月　広島・長崎に原爆投下<br>戦争終結の詔書を放送（玉音放送） | ２月　ヤルタ会談<br>６月　全独軍無条件降伏 |

## 出演者と配役

| | | | |
|---|---|---|---|
| 陸軍大将　阿南惟幾 | 星　光二 | 陸軍大将　山下泰文の妻 | 松村明美 |
| 妻　綾子 | 田中ゆみこ | 陸軍少佐　畑中 | 井上　堅 |
| 惟幾の叔父 | 木田義隆 | 陸軍中将　宮崎 | 玉田勝樹 |
| 海軍大臣　米内光政 | 三上一典 | 大臣付武官 | 桧垣秀行 |
| 陸軍中佐　竹下正彦 | 橋本富仁夫 | 婆や | 川上　幸 |

星　光二

田中ゆみこ

木田　義隆

三上　一典

橋本富仁夫

松村　明美

井上　堅

玉田　勝樹

桧垣　秀行

川上　幸

コロス1
西根　明美

コロス2
渡辺　生海

コロス3
生野　絢絮

## 練習風景

## 阿南 惟幾（あなみ・これちか）略歴

【1887年～1945年】日本の帝国陸軍軍人。最終階級は陸軍大将。第二次世界大戦終戦時の陸軍大臣。大分県竹田市玉来出身であった父の阿南尚は内務官吏として転勤を繰り返したため、幼少時は東京、大分の竹田、徳島などを転々としながら育った。本籍は竹田市に置かれている。広島陸軍地方幼年学校卒業後、陸軍士官学校を経て陸軍歩兵少尉に任官。歩兵中尉、歩兵大尉を経て陸軍大学卒業。陸大の入学試験には３度失敗しており、卒業の席次も60人中18番と目立つものではなかった。

1928年（昭和３年）８月10日－歩兵第45連隊留守隊長。
1929年（昭和４年）８月１日－侍従武官。
1930年（昭和５年）８月１日－大佐に昇進。
1933年（昭和８年）８月１日－近衛歩兵第２連隊長。
1934年（昭和９年）８月１日－東京陸軍幼年学校長。
1935年（昭和10年）３月15日－少将に昇進。
1936年（昭和11年）８月１日－陸軍省兵務局長。
1937年（昭和12年）３月１日－陸軍省人事局長。
1938年（昭和13年）３月１日－中将に昇進。
　　11月９日－第109師団長。
1939年（昭和14年）９月12日－参謀本部附。
　　10月14日－陸軍次官。
1941年（昭和16年）４月10日－第11軍司令官。
1942年（昭和17年）７月１日－第２方面軍司令官。
1943年（昭和18年）５月１日－大将に昇進。
1944年（昭和19年）12月26日－航空総監兼軍事参議官。
1945年（昭和20年）４月７日－陸軍大臣（～８月14日）。
　　８月14日夜、陸相官邸で自刃。
　　義弟の介錯を拒み翌15日朝絶命。

＊惟幾の妻は陸軍中将の竹下平作の次女の綾子。綾子は昭和20年８月14日次男の惟晟が43.11.20中支常徳作戦で戦死したことを、戦友の訪問により知り、翌日の８月15日、夫である惟幾の自決を聞くことになった。戦後しばらくし、綾子は出家し、長野県で戦没者の菩提を弔う余生を送った。
残された子供たちは戦後それぞれの分野で貢献された。

### 遺　書

一死以て大罪を謝し奉る
昭和二十年八月十四日夜　陸軍大臣　阿南惟幾
神州不滅を確信しつつ

### 辞　世

大君の　深き恵に　浴みし身は
言ひ遺こすべき　片言もなし

### 参考文献


角田房子 著
「一死、大罪を謝す　陸軍大臣阿南惟幾」（新潮文庫）

半藤一利 著
「日本のいちばん長い夏」

大木本憲美 著
「東部ニューギニア戦の実証」

曽根一夫 著
「戦史にない戦争の話」

阿川弘之 著
「米内光政」

藤原作弥 著
「満州の風」

芳地隆之
「満州の情報基地ハルビン学院」